

Forest

2011.11.28 3学年通信 第11号

今回は、お話をひとつ紹介します。
皆さんが将来を考えると、参考になる話
だと思うのですが、いかがでしょうか。

ボクの進路

山路敏英（東京・葛飾区金町中学校）

ボクは子どもの頃、「電車の運転手になりたい」と思った。なりたいたいって、オトナたちが聞くからそう答える程度のものであった。あるとき、海水浴に行くのはじめてあこがれの湘南電車にのったのに、酔ってしまった。乗り物に弱いことが分かって、電車の運転手をあきらめた。「あのほそい二本のレールの上をはずれないようにハンドルをきって運転するのはボクにはムズカシすぎる」と自分に言い聞かせた。

中学のころ、ラジオ作りに夢中だった。3年のとき担任の先生に聞かれて「電気技師になりたい」と答えた。でもまだ漠然としたものだった。ベンキョウのことより、「つぎにどんなラジオを作るか」のほうが大事

だった。当然、第1希望の高校には落ちた。

高校のころ、数学と物理の成績が悪かった。そういえば、小学校のころから、「くり下がりの引き算」「割り算」「分数」「すばやい暗算」が特にダメだった。担任の先生に「理科系はムリです」と言われた。それで突然、屋台のおでん屋になりたくなった。自由気ままに見えたいし、竹輪も昆布もタコもみんな10円均一にしていればボクの計算力でカバーできると思った。でも、「ぜったいになりたい」というほどではない。おでん屋なら、大学を出てからでもまにあう。

考えてみるとボクが高校に進学したのも、大学に行こうと思ったのも、要するに自分にこれといった目標がなかったからだ。

スポーツ苦手、ちび、体力なし、気が小さい、根気なし、のろま、特技なし。

これだけそろったボクだから、大学を出ておいた方がいいかもしれない。自分に自信がなかったぶん、受験勉強には力を入れた。

大学は経営工学科というところに入った。そこは楽しかったが、なんとなく4年たってしまって、就職試験をなんとなく受けた。オルゴールメーカーと電気部品メーカーと2社ともみごとに落ちた。数学がぜんぜんできなかったのだからしかたないが、ずいぶんキズついたものだ。

とりあえず無職もカッコ悪いし、ボクは家の仕事（会計事務所）を手伝うことにした。父は喜んだが、仕事の上でつらいことが一つあった。

それは「仕事に出ると、ほとんど社長という人々を相手にしなければならない」と

いうことだ。社長は決して悪い人たちではないが、「世間話をしながら仕事をしなければならぬ」というのがボクにとって苦痛だった。口下手な上に、野球、ゴルフ、競馬、すもう、芸能など、ボクにはほとんど興味がないから話の間がもたないのだ。

「ボクにはこの仕事を続けられそうもない」と思った。では他にどんな仕事ができるのか。新聞の求人欄を見る。

セールスマン：口下手で気が小さいから無理。建設作業員：チビで体力がない。自動車組立工：のろまでベルトコンベアーの速さに追いつけない。……見れば見るほど、自分の無能さにあきれる。

そんなとき、父の口ぐせを思い出した。「日本の国は貧乏だから、経済を立て直さなければならない。」そして「これからの日本は若い人たちでつくっていかなければならないのだから、教育の仕事が重要になってくる」の二つ。ボクの尊敬する父の言葉から思い浮かんだ仕事、それは「教師」。

そうだ学校の先生がいい。これなら「会計事務所の後継ぎにならない」といっても、少しは父も理解してくれるはずだ。

無着成恭むちやくせいきょうの『やまびこ学校』(角川文庫)を読む。教師っていう職業はなんか楽しそうだと思った。ボクは自分が楽しそうに授業している姿のイメージを描いていた。

しかし重大なことを見過ごしていた。それは〈教師はしゃべって仕事をするのだ〉ということ。もしそのことに気づいていれば、口下手なボクはこの仕事を選ばなかったろう。その時は「教科書という台本があるから大丈夫」と思ったのかもしれない。

ところで「教師になろう」と決心したものの、なんと「教員免許状」というものをもっていなかった。そこでまた大学の夜間部に3年次編入し、2年間で免許を取った。「気力体力に欠けるボクでも、目的がはっきりしているとなんとかやってしまうものだなあ」と思った。

ただ、教師になろうと決心したことは父にはナイショにしておいた。それは、「父のがっかりした顔を2年間も見続けながら家業を続けるのは耐えられない」と思ったことと、自分の性格からして、「その決心が途中で軟弱にもくずれてしまうことが十分にありえる」と思ったからだ。しかし、2年間、その夢は消えることがなかった。

埼玉県埼玉県の教員に採用が決まった時、父に言った。「ボクは教師になります。会計事務所の得意先にも申し訳ないし、お父さんの立場もあるから、ボクのことを勘当かんとう(親が子の縁を切ること)してください。家を出ますから。」すると父は「子どもが親に勘当してくれ、なんてアベコベな話は聞いたことがないぞ。」と笑った。そして「教師は責任が重い、いい仕事だ。しっかりやりなさい。」と言ってくれた。

ボクが教師になろうと決心したのは25才、実際にその仕事については27才のときだった。中学卒業のときにはもう仕事を決めてしまう人もいるし、ボクのように大学をでてからもしばらく決められない人もいるのだ。

「自分の生涯の仕事を選びとっていくということは、同時に他の仕事の可能性をあきらめていくことではないか」と今思う。たぶん、その作業にかかる時間は人によって大きく違うのだろう。

ボクは「進路指導」と聞くと思わず自分のことを考えてしまい、背中がかゆくなってしまう。でも、少なくとも言えるのは、「今ボクは中学校の教師という仕事を楽しくやっている」ということだ。そして「センセイの科学の授業は楽しいよ」と言われることがうれしいし、そういう授業ができる自分に誇りを持っている。それにたのしい授業をすることで、ステキな子どもたちと出会うことができ、いちばん多感な青春時代をともにできるシアワセがある。

ボクは今、教師になってよかったと思っている。

もし、あなたが自分の進路や職業のことで悩んだり挫折しそうになったとき、ボクのこの話を思い出してくれるとうれしい。

いかがでしたか？

ヤマジさんも、今は定年退職されて、大学で講師をされています。

とてもゆったりした口調の、いろいろな相談にのってくれる先輩です。